



闇夜の湿原から聞こえる謎の声



～ 北海道のクイナ類・草原性小型サギ類の分布状況を探る ～

松岡和樹、米田裕之、道川富美子、嘉藤慎讓、庄子信行、吉野勇太、浅利裕伸



はじめに

ポイント 1 北海道は湿原の宝庫！！

『北海道 湖沼と湿原』（2000年 北海道新聞社 大木隆志）には、232カ所の湿原、湖沼が記載されています。北海道には、太平洋沿岸からオホーツク海沿岸に広く分布する海跡湖、石狩川で代表される平野部の河跡湖、サロベツ原野や釧路湿原等の沼々、さらには浮島湿原といった高層湿原等、成り立ちが様々な大小の湖沼、湿原が広く分布しています。

ポイント 2 湿原に生息する鳥類が減っている！？

遡ること約90年前(大正時代)、なんと北海道には1771.99km²もの湿原が分布していました。しかし、宅地や農地開発等の度重なる人庄を受けて、現在では708.67km²まで縮小しました。このような環境変化は、湿原に生息するクイナ類や草原性小型サギ類の生活にも大きなダメージを与えました。環境省が2006年にレッドリストの見直しを行い、ヒクイナやヨシゴイ等の湿原に生息する鳥類を軒並みランクアップさせたのは、記憶に新しいと思います。

ポイント 3 北海道の湿原保全に役立てる！！

北海道では、2科13種のクイナ類と草原性小型サギ類が確認されていますが、草に隠れて目視困難であることが大きな足かせとなり、実のところ多くの種の分布状況が把握されていません。湿原の指標生物となる、これらの種の分布状況を把握することは、北海道の湿原保全の上で極めて重要な資料になると考えています。

《北海道鳥類目録記載種》

■クイナ類=9種

- ・シマクイナ
- ・クイナ
- ・シロハラクイナ
- ・ヒメクイナ
- ・ヒクイナ
- ・コウライクイナ
- ・ツルクイナ
- ・バン
- ・オオバン



■草原性小型サギ類=4種

- ・サンカノゴイ
- ・ヨシゴイ
- ・オオヨシゴイ
- ・ササゴイ



調査の目的

湿原保全に役立てる

● 各種の鳴き声パターンを把握する！！

クイナ類等は、様々なパターンで鳴くことが知られていますが、そのパターンが明示された資料は非常に少ない状況です。そこで、録音された鳴き声を活用して声紋分析を行い、各種の鳴き声パターンについて分析します。この分析結果は、下記の分布状況の把握に関する調査精度の向上にも役立つものと考えています。

● 北海道の分布状況を把握する！！

クイナ類や草原性小型サギ類は、夜間に活発に鳴きます。この特性に着目し、夜間の鳴き声確認調査を行うことで、北海道における分布状況の把握（分布マップ作成等）を目指します。



調査方法

方法1 自動録音法

クイナ類や草原性小型サギ類が生息する湿原への接近は、多くの危険が伴います。夜間や早朝は、ヒグマの存在や足元のぬかるみ等から、その危険度が高まります。そこで、リニア PCM 形式（デジタルデータの圧縮や加工を一切行わない形式）で録音が行え、時限稼働が可能な IC レコーダー（OLYMPUS 社製 LS-7 等）を用いた自動録音法を採用し、一定時間帯の鳴き声を録音します。

方法2 鳴き声再生法

クイナ類や草原性小型サギ類の鳴き声を再生し、これに反応する鳴き声を記録します。この方法により、効率よく生息有無を把握することができます。

※調査時間について

クイナ類や草原性小型サギ類は、日の出日の入り前後によく鳴くとしている生態図鑑等が多くみられます。したがって、上記の夜間調査は、日の出前後の 30 分、並びに日の入り前後の 30 分、合計 2 時間の実施を原則とします。



調査地

調査地は、北海道全域の湿地とします。調査スケールは、まず 14 総合振興局・振興局レベルとし、次に市町村、第 1 次メッシュ、第 2 次メッシュ、第 3 次メッシュの順で調査スケールを詳細化していく予定です。



調査期間

調査期間は、クイナ類と草原性小型サギ類が渡来する 5 月～8 月とし、2～3 力年計画で分布状況の把握に努めます。

期待される効果

湿原に潜むクイナ類や草原性小型サギ類は、とにかく目立ちません。隠密行動が仇となり、誰も気付かないうちにいなくなっている！？・・・のではないのでしょうか？北海道に至っては、その分布状況ですら明確にわかっていない状況です。

我々の研究では、まず クイナ類や草原性小型サギ類の各種について音声パターンを把握する（鳴き声のソナグラム化・繁殖ステージ毎の分析等）ことにより、その生態の解明に努めます。これだけでも学術的にとても意義があることだと考えますが、北海道における分布状況を明らかにする上でも必要不可欠であると考えています。

また、研究を継続して分布状況を把握することで、より詳細な生息環境・生態情報が解明され、我々の最大の目的である『湿原保全』に繋がると考えています。